

第11分科会

地域の再生と 環境の仕事おこし

鍛谷 宗孝（日本労協連）



1 「地域の再生と環境の仕事おこし」と題して行われた本分科会は、前回広島での「産業廃棄物でよごされる瀬戸内」への市民の真摯なとりくみを受けて、「持続可能な社会の実現のために、市民が主体となっていかに環境の問題にコミュニティの再生をかけてとりくむか」ということを主要なテーマとした。

分科会は、前田典秀さん、土方彰子さん、小川和之さん、三津井修さんの順で報告をうけ、その後、コメンテーターの勝部欣一さん、

都筑建さん、会田節子さんからコメントをいただく流れで進行した。報告、コメントとも内容が豊富なため、時間がいくらあっても足りない状態で、議論の時間がほとんどとれなかったのは残念であった。それでも、課題の大きさと分野の広さに圧倒されながらも、地道で豊かな実践の報告に参加者それぞれが刺激をうけ、今後の活動にプラスになったというのが全体の感想。

2 まず参加者の意見感想から紹介しよう。

小川さん（株式会社きかんし）

仕事とは別にスキーマの同好会に参加して東京の責任者をしている。スキーマ建設が環境を破壊するということもあるが、春になって雪がとけるとリフトの下の地面がたばこの吸い殻だらけで「真っ白」になっている。この辺の意識をかえていくことは大事な事。分科会は、実践している人の話をスライドをまじえて直接聞けてよかった。少し難しい話が多いように思った。

天谷和夫さん（クリーンエネルギーフォーラム）

私は、費用のあまりかからない方法で環境測定（ダイオキシンなど）ができるやりかたを考案しており、市民の運動としてできないかいつも腐心し

ている。具体的な成功例を聞いて少しづつではあるが、新しい社会がつけられつつあると心強く思った。持続可能な社会に向けて、協同労働の役割がますます重要であると感じた。

森下雅子さん（1級建築士事務所 あとりえ・あんと）

環境問題の解決、特に自然エネルギーに関する活動の報告としてはとても面白かった。いわゆるビジネスチャンスも沢山ありそうに感じたが、自治体、企業レベルの大きなスケールの場合、ビジネスとしてチャージすることがある程度容易だろうが、ごく小さなボランティア的な活動の場合、活動の経費をどうするのがまだよくイメージできない。

パネリスト

前田典秀（クリーン・エネルギー・フォーラム）
 土方彰子（リサイクルお店やさんごっこの会）
 小川和之（群馬中高年雇用福祉事業団）
 三津井修（エス・アール・シー）

コメンテーター

勝部欣一（クリーン・エネルギー・フォーラム）
 会田節子（有機農産物普及・堆肥推進協会）
 都筑建（エコテック）
コーディネーター
 鍛谷宗孝（日本労協連）

西川恭子さん（愛知高齢者就労事業団）

はじめに第6分科会（労協法）へ参加しようと思
 っていましたが、全体会でNPO緑の会の恒川さん
 ご夫妻の話を聞いて変更しました。事業団の3カ年
 計画の中で仕事おこしにつながるものがあればと
 思っただけなのですが、まずもって、今年から
 名古屋市で始まった分別ゴミの問題から、自分自
 身の問題であったので夢中で聞きました。ゴミの
 問題ばかりでなく、自然エネルギーに関する話も
 本当に興味と希望をもってききました。日本に資
 源がないのではなく、あることが判った（これは、
 前田氏の報告のなかで「日本は石油やウランはな
 いけれど、太陽、風などの資源は豊富という報告
 を聞いてということ：鍛谷注）。エネルギーといえ
 ば今は石油が原発ぐらいしか考えないようになって
 いるのが、今日はこんなにも日本の環境と資源
 のことを考えている人たちがおられることを嬉しく
 思いました。

大久保郁生さん（千葉高齢協）

カンビンその他のリサイクル法案が、環境改善
 のガンになっていることを知らされ、びっくりし
 ました。太陽電池については、素人の私にはもう
 一つわかり難かったが、設置の費用、完成後の
 電力費の節約の具体的な説明が欲しかった。

田中哲紀^{あきこ}さん（東京農工大）

小さな動きからでも各地域ごとに環境持続的な
 地域に向けて取り組んでいるという報告は、力強
 いものがありました。しかし、まだその動きは小
 さく、バラバラなところ、クリーンエネルギーな

どの考え方が実践になかなか結びついていかない
 という問題があることを強く認識しました。私は、
 社会に出たとき、環境持続的な地域の普及を推進
 できるような活動ができればと強く感じています。

学校という場から離れ、社会の動きを少しでも
 垣間見ることができ、とても刺激となりました。
 私のテーマである「環境持続的な地域社会の構築」
 を理論だけでなく、こうして社会の実践や実際に
 そのために取り組んでいる方々の報告、意見を聞
 くことで、私自身またテーマの整理、新たな目標
 が見えてきました。もっと学生に聞いてもらいた
 いです。

勝部欣一さん（クリーンエネルギーフォーラム）

実例報告が多くてよかった。都市計画の市民側
 からの総合的な計画提起をする必要があり、その
 中に協同労働も組み入れることが必要。範囲が広
 すぎるので、報告を系統的に整理ししぼることも
 大切。

以上、大学生から女性の1級建築士、そして
 仕事とは別の活動のなかから環境に関心をも
 っている社会人、高齢協組合員など多彩な顔
 ぶれの参加者がそれぞれの立場で環境問題へ
 接近している。これは、社会的にも同様のこ
 とがいえそうで、それぞれの立場での関心の
 高まりといまだ有効な行動にうつれないもど
 かしさ、それぞれの出会いの場がない弱さな
 どが感じられるものである。

3 つぎに報告を紹介します。

前田典秀（クリーンエネルギーフォーラム）

えりも町のとりくみから

「えりもの春～は～、何もない春です」と森進一が歌ったときに、北海道えりも町の人たちは、あまり快く思わなかったようです。しかし、森林の乱伐採で緑の森が「えりも砂漠」となり海は赤土によって青から赤く変色し、魚はいなくなるというのが現実でした。そこで、昭和28年ごろから緑化事業がとりくまれ、海は青く魚はもどり、森進一の歌もゆとりをもって聞けるようになってきているそうです。また、風が非常に強く、風力発電の風車が2基設置され、風力による町おこしに取り組んでいる。人間の傲慢さ、それを反省し自然と共生する21世紀をみるひとつの事例として紹介します。

大きな変化の時期を迎えた クリーンエネルギー

クリーンエネルギーをめぐる最近の動きは、大きな変化を見せています。自然エネルギー、風力、太陽光、バイオマスなどです。国際的には、温暖化防止対策を2010年に向かって削減しようという取組が始まり、今回のハーグ会議でも日本とアメリカが孤立するという現状。

ヨーロッパでは原子力発電をすすめる国はどこにもない。8割を原子力に頼っているフランスでも原子力発電を廃止していく方向。デンマークでは6,000基の風車が設置され、将来消費電力の半分を風力で賄う計画。それを雇用の確保にも結びつける。現在、3万人が風力発電で働いている。

日本でも自然エネルギー促進法を超党派で準備しているが今国会では通過しない。この

法律では、電力会社への電力の買い取り義務、売電価格を設定している。現在、電気料金の2%を国民は電源開発のために払っている。これが年間で4,000億から4,500億集まっており、そのうち1,000億が余っている。それを自然エネルギーに回そうという提案しているのがこの法律案。また、畜産3法（糞尿の未処理垂れ流しに対する処置：平成16年までに）など3つの法律が新たに制定される。300の自治体が新エネルギービジョン策定事業にとりくみ、東京電力のグリーンエネルギー基金など企業も活動をはじめている。たとえば、飯田市全世帯の3割（＝1万世帯）に太陽光発電を普及するという計画をもっている。山形県立川町では、2,600万KW/h自然エネルギーで行うという計画をもっている。

電力の自由化もすすむ。2003年に見直すことになっており、NTTのような状況になる。欧米ではすでにすすんでいる。これからは、大規模な発電所をつくるのではなく、燃料電池など小規模分散型電源の技術がすすんでおり、クーラーの室外機ぐらいの大きさで発電できるようになる。

技術、経済の進展

風力発電は、全電力の4割ぐらいがをまかなえるといわれている。日本全国で200基、次第にすすんできているが、まだ、市民が主体になったとりくみになっていない。太陽光も四国全体に太陽電池を設置すれば日本全国の電力をまかなえる。日本には資源がないといわれているが、太陽、風、そして糞尿（牛乳1ℓつくるのに糞尿3kgでる）などがありそれを活用する技術はすでに開発されている。

また、燃料電池（水の電気分解の反対）のめどがついてきた。ドイツで原子力発電をやめたのはこれが原因といわれている。21世紀は水素の時代となります。すでに開発競争は

始まっている。

地域住民とのかかわり

岩手県の宮澤賢治の思想がだいじ。クリーンエネルギーはローカルエネルギー。地元の人たちがいかに有効に使うか。農村では、田んぼや畑、ウンコからもクリーンエネルギー、都会では屋根やごみからクリーンエネルギー、自治体では仕事づくりという観点からクリーンエネルギー。都会と農村との提携。

おわりに

電力1KWつくるのに100gの二酸化炭素がでる。わが家わが町でどれだけのエネルギーをつかっているのか、それによる二酸化炭素がどのくらいでているのかをまず知ることから始めよう。そこから、仕事おこし、地域づくりがはじまる。

土方彰子（リサイクルお店やさんごっこの会）

○ビンやカンの集団回収をまず始めました。集団回収では、たとえばアルミ缶が一番高く売れるのでアルミ缶をいっぱい集めてくることになりかねません。しかし、環境全体のことを考えてごみを減らすのが目的ですから、ビールは缶でなくビンビールを飲もうという運動をやってきました。その結果、八王子市でも条例で分別回収がはじまり、どろだらけのこの作業も楽になりました。残ったのは、プラスチックと生ごみです。

○コンポストに補助金がついていましたので、各家庭ではコンポストを使っていましたが、冬は発酵が遅く使えない、夏はハエが発生し使えない、ということから、密閉型バケツとぼかしによる堆肥化づくりに切り替えました。コンポストより効果的でしたが、各家庭の範囲にとどまって運動になかなかありませんでした。そこで、わたしが近所のまとめ役にな

ってバケツを集め始めました。しかし、庭もそうは広くありませんので、それでは農家と連携をとろうということになってきました。農家との連携がわたしたちの活動の特徴です。○スライドを利用して、家庭での生ごみ処理。水切り、密閉バケツ、庭のコンポストなどの説明。匂いも無く使いやすい。バケツからでる水分（液肥）は花の肥料にしている。

近所から集めたバケツは農家の鈴木さんの堆肥小屋にもって行ってまぜてもらおう。ここは昔ながらのとてもよい堆肥がつけられていて、その堆肥でできた野菜を1週間に1回配達している。この利用の輪がなかなか広がらないのが悩みのひとつ。

また、酪農家の鈴木さんのところにもバケツをもっていつている。ここは30頭の牛を飼っており、町のなかに農業をというテーマで市民運動をおこなっている。田植え、稲刈りなど子供たちもまじえた農業体験などの活動をおこなっている。糞尿から堆肥をつくる作業に近く障害をもった子供たちが携わっている。

酪農家の鈴木さんのところには、「せいのが森保育園」の生ごみも持ちこまれている。ここは、1週間でバケツがたったの3つ。というのは、環境問題に積極的で、子供たちが食べきるようにしているから、でるのは調理残さだけ。調理室を見えるようにして、子供たちの食欲をわかしたりする工夫がされている。子供たちは、生ごみが牛舎にもっていかれることをちゃんと知っているし、できた堆肥は保育園の庭のさつまいも畑にまかれています。また、園庭にはビオトープがあり、ビオトープの水の循環には2基の小型風車によっておこされた電力でタービンが回っている。とても希望のもてる保育園でもっとひろがればいいと思います。

レは車椅子で入れるようにも2ヶ所つくろう、暖房は床暖房がよい、などさまざまな意見がでました。そのとき、エネルギーは自然エネルギーにしようとしたしは提案しました。しかし、費用がかかるということもあり反対意見が多かったです。しかし、床暖房では電気代がかかる、どうにかならないかという話のなかで、「太陽光発電では電力会社に売電できる」、つまり、集会所をつかっていないときには電力があまるので、2つついたメーターで出入りがカウントされており使っていない電力を電力会社が差し引いてくれるということをお願いしたら、それはいいということになったわけです。

費用も2600万とだいぶかかりましたが、260世帯の3年間にわたる寄付でまかなうことができました。

4 コメントーターのコメントから

都筑建 (エコテック)

太陽光発電の技術開発による効率化小規模化、その結果の利用しやすさの増加等についてコメントされた後、自然エネルギー促進法の必要性和自然エネルギーを直接かつ最大限利用することの大切さを強調された。ともに、自然エネルギーが次代を担うエネルギーになっていくために重要な位置をもつ。

自然エネルギーの直接総合的な利用とは、例えば、家をつくる、昼間、電灯を点けなくともよい家屋、エネルギー消費の少ない街づくりデザインなど、街をつくる場合に総合的な計画が必要。いわゆるローテクといわれる部分についていかに自然エネルギーを活用していくかという面でもある。

会田節子 (有機農産物普及・堆肥推進協会)

有機農産物を消費をしよう、生ゴミを堆肥化しよう、それによって循環の輪をつくろうということで93年から活動を開始。土方さん

の報告は、地域内での循環をつくっている大変すぐれた例。農家、障害者施設、保育園とのネットワークも大切にされ見習いたい。全体会での恒川ご夫婦の実践も大事で、来年度には1,000世帯を対象にした堆肥化が市によって事業化されるということでもよこんでいる。

食品のロスについて。1960年代には一人当たり1食200キロカロリーのロスだったものが、95年には600キロカロリーになっている。これは一人が毎日1食分をすてているということ。また、45,000万トンある産業廃棄物のうち「食」関連は340万トン、一般廃棄物のうち事業系が600万トン、家庭が1,000万トン合わせて2,000万トンの生ゴミ、ロスがある。日本の米の生産量が年間1,000万トンですからこれは大変な数字。農業のなかで解決し、60年代のレベルにいけばと思う。

自治体はまだ数えるほどしかやっていない。最大のネックは、異物混入、つまり住民に分別を徹底するのが無理ということ。

東村山市が全国に先駆けて、燃やさない埋め立てないを始めた。市営住宅からはじめた。処理機の置き場の選択がはじめの難関。自治会長のお宅のそばにおいた。処理機をおいたらそこでコミュニケーションならぬ、ゴミコミュニケーション、がはじまり、つながりの薄かった市営住宅の人のつながりゴミニュティが出来始めている。

多古町の事例（堆肥化、コープ東京、品川区学校給食との連携）、秋田県小坂町の事例（生ゴミの徹底分別した家に地域内通貨＝介護保険にも使える、養豚、堆肥、有機野菜）、山形県長江市(台所と農業を結ぶレインボープラン)。

5 以上、報告が中心の分科会になりました。次の機会には、豊かな経験を十分交流できると共に、持続可能な社会づくりへ市民の活動がさらに発展するないようにしたいと思います。